



作文 3部

農林水産大臣賞
のうりん すい さん だいじん しょう

努力の結晶

愛媛県愛南町立一本松中学校二年

保田祥汰

僕の家は祖父や父、家族みんなで米を作っている。祖父は今年八十三歳になるが、「大変だ。大変だ。」と言いながらも、元気に田んぼで作業をしている。僕も何度か手伝ってくれと頼まれたことがあるが、学校や部活動等と重なって、手伝うことはなかなかできなくて、悪いなと思うことが多かった。

そんな祖父や父の苦勞を身近に見て育ったはずなのに、毎日毎日見ていると、それが普通になってしまい、大変な作業だとはあまり思わなくなっていた。

そんなある日、いつも通り家族そろって晩御飯を食べている時、つい、「僕の家ではお米を家で作っているから、ただみたいなのだね。」と断言してしまった。僕としては食べ盛りの僕たちの食費が少しでも軽くすんで有り難いという気持ちも込めて言っただけだったが、父は少しムツとしたような顔で、「そんな訳がないだろ。」と返してきた。少し気まずい雰囲気のまま、その時の会話はそれで終わった。

父の「そんな訳ないだろ。」の一言が心に棘のように刺さり、なぜ、そう言われたのかを考え続けていた。とつとつ、次の日の夕食の時、思い切って父に尋ねてみた。すると、「お前は、おじいちゃんが毎日働いている姿を見ていないのか。今、お前が食べているそのお米は、おじいちゃんやお父さん、みんなが汗水垂らして作った努力の結晶なんだぞ。」と叱られてしまった。僕は黙り込んでしまった。その時、僕はお米の本当の価値を実感した。お金に換算した価値などではない、真の価値を――。

その日から、僕は改めて、祖父や父の働く姿を見つめた。朝早くから田んぼに鴨を入れるじいちゃん。毎日、出勤前に田んぼの水量や稲の育ち具合を見廻る父。田んぼの虫や草を鴨に食べさせ、除草剤や殺虫剤を使わなくてもいい、体にやさしい米作りをしてきているのは、僕たち家族の健康を第一に考えてくれる祖父や父の深い愛情の賜だったのだ。鴨の雛を買い、大きく育てて、鴨米を作るより、除草剤や殺虫剤をまいてお米を作る方がずっと楽だし、費用もかからないに違いない。それでも朝夕鴨の世話をし、安全なお米を作り続けてくれるのは、僕たち家族のためだ。

そんな祖父や父に向かって、僕は「うちのお米はただみたいなのだね。」と言ったのだ。

ただなものか。どんな高価なものよりも尊い愛情と努力の結晶だった。うちの米は、どこに出しても誇れる我が家の宝だった。

そのことに改めて気付かせてくれた父の一言に、僕は感謝している。愛南町でも数軒しかしていないという鴨米を作り続けている祖父に改めて尊敬の念を抱いた。

我が家のお米の一粒一粒が輝いて見えるのは、そこに家族の愛情と力が宿っているからだ。毎日こんなにおいしいお米を食べさせてくれてありがとうという感謝の気持ちを忘れず、一粒一粒味わって食べたいと思う。そして、ちょっと照れ臭いが、いつかきちんと言葉に出して、祖父や父にこの思いを伝えたいと思っている。

お米の収穫が終わると、鴨たちはよそへ引き取られて行く。ちょっと寂しいが仕方がない。

自分も近い将来、祖父や父のように、環境にやさしい、体に良い米作りをしてみたいと最近思うようになった。僕が一人前に米作りができるようになるまで、じいちゃんには長生きしてほしいと思う。

鴨米を越える工夫を、僕はその時までを考えておこうと思う。